

3・4・5歳児の表現について

—描く活動を通して—

○塩井 敬子 廣崎 有美 上山 実千代 中村 公光子 汾田 直美
(武庫川女子大学附属幼稚園)

I. はじめに

「描く」という表現は、幼児にとって生活や遊びの中で日常的に行なわれる造形表現の一つである。

本園の幼児の中には、この「描く」という活動に親しみをもち自ら進んで取り組む幼児がいる一方、どうすればよいかわからない戸惑いを感じ、描くことに自信がもてない幼児もいる。そこで私たちは、それらの幼児が思いを自ら表現し、描くことを少しでも楽しめるようにしたいと考えた。

II. 研究方法

描く活動における3・4・5歳児それぞれに見られる幼児の姿から、描くことに取り組みにくい幼児の要因を探り、個々の幼児が自己を発揮する過程においてどのような環境構成及び教師の援助が必要であるかを研究協議し、考察する。

III. 事例からの考察

3歳児では、今まで家庭での経験がなかったり、パスやペンなどの素材に親しみがもてなかったり、汚れを気にしたりするなどの要因が挙げられる。

《3歳児 4月》

保育室に大きな紙を広げ、パスを大好きな車に見立てて線を描いて遊ぶ。

R男は教師の誘いかけに「R男はしない」と首を横に振り、部屋の片隅に座ったままである。

教師が「競争だよ。どの車が速いかな。ヨーイドン!」と、声をかけると他の幼児たちがパスで線を描き始める様子をじっと見ている。しばらくして、「ぼくもヨーイドンする」と参加する。

教師はR男の様子を見守りながら全体での遊びを進め、楽しい雰囲気を作ることでR男にもやってみたくなるような働きかけを行っている。この事例では、「ヨーイドン!」という教師の言葉にR男の心が動かされ、描き始めるきっかけをつかむことができた。パス＝描くための道具という固定観念を持たず、車に見立ててパスを走らせたただけなので、入園当初の3歳児にも興味をもて、楽しめたと思われる。

大きな紙は開放感があり魅力を感じられると考え

準備しているが、この時期には、各自の紙を準備することで自分のスペースとして落ちついて取り組めたり、自分のペースで遊びが楽しめたりするのではないかなどのことも配慮し、絵の具など新しい素材も加えながら、再度環境の見直しを図ることも大切である。

この他、園庭の手洗い場のセメントに水が飛び散ると黒い模様がついたことから、セメントに水でぬれた手を押ししたり指で線を描き始めたり、地面に棒や傘の先端などで線を描いたり、曇りガラスに指で描いたりなど、幼児が遊びの中で見つけたことを共感し、認めていく。そして、指や手・棒などいろいろな方法や身近な素材を使って、線を描く楽しさや面白さを十分に味わえるよう、個々の興味や発達段階に応じて保育をすすめることが大切である。

4歳児では、進級児・新入児が入り混じるクラスの中で、特に新入児には3歳児と同様な要因も挙げられる。進級児・新入児それぞれに、描きたい気持ちはあるものの、形を意識しすぎて“どう描いてよいのか”と戸惑ったり、自分の思いを素直に表現することに不安を感じていたり、描きたいイメージが広げられなかったりなどの要因もみられる。

また、汚れることを嫌がる、何事もきちんとさせたいなど保護者の意識や家庭環境なども大きな要因となっている。

《4歳児 6月》

4歳児2クラス合同で、テラスに全紙を何枚もつなげた長い紙を広げ、何色かの絵の具で塗り広げたり、手や足型をつけたりして遊ぶ。普段は友達の様子をじっと見て、描くことになかなか取り組みにくい幼児たちも、この時は自分から絵の具に向かい、紙の上で絵の具を滑らせ、「海の中みたいだ!」「泳ごう!」など、自分の思いを話しながら活動する。その後、クラスで作品を広げると、「ここは、ぼくが手型をつけたところだ。青い魚みたいだ。」など自分からコンテやパスを取り、目を描いたりその周りに石や泡など、自分の描きたいものを描いたりしている。

この時のテラスに広げられた長い紙は、興味もてる魅力的な素材・環境構成であったと思われる。筆やペンなどの素材とは違って、手や足などを使って塗り広げる活動は心を解放し、形という固定観念を取り払い描くきっかけとなった。進級児・新入児共に楽しみ、満足できる活動であった。

また、幼児も教師も“作品”を意識せずに活動してきたこと、2クラス合同にすることでダイナミクスが生まれ、活動に集中する中で周りの目を気にすることなく充分に楽しめたことが良かった。このような経験の積み重ねが、想像する意欲をかきたて、描くことの喜びや楽しさにつながっていくと思われる。さらにこうした経験だけでなく、幼児自身が物の形・特徴などに気づいたり、意識して見たりしたことを描く機会をもつなど、活動のバランスも大事ではないかと考える。その他にも、直接的な感動体験を増やし、幼児が“描いてみたい”という意欲がもてるよう支えていくことも大切である。

また、幼児期に必要な経験や、作品としての結果だけを見るのではなく、遊びの過程や幼児の思い、その子なりの表現を認めていくことの大切さを保護者にも知らせ、家庭の協力も得られるよう努めている。

5歳児では自分や周りが見えてくるようになり、友達と比較したり、周りの人の評価を気にして失敗を怖れたり、イメージが充分に広がらずに停滞したりなど、自分の表現に自信がもてず、さまざまな要因が複雑に絡み合っている場合が多い。

《5歳児 7月》

6月に動物園に園外保育に行った経験から、「動物たちの七夕まつり」というお話を作り、ペープサートにして遊び始める。
背景の海を描くために欲しい紙を教師に伝えたり、素材の準備を一緒にしたりする。波を描こうとH子は青と白の絵の具を混ぜ、「こんな色が出来たよ!」と他児に伝えたり、他の幼児も魚や海草など海のイメージを広げて工夫して描いたりする。H子は何か描きたい様子だが、絵の具を持ったまま立っている。また、A子は絵の具をつけすぎて画用紙の上に垂らしてしまい、途端に緊張した表情になる。N子が「これ、ブクブク泡が出ていることにしようよ。」と提案する。
「そうやね!ブクブク……」と大小の泡を描き加え、A子もほっとした表情になる。

この時のH子は遊びに参加したものの、“自分は何を描こうか……”と戸惑い、“これを描いてよいのだろうか……”と周りの目を意識したり、躊躇したりしている。

共同画などの目的のある絵を友達と一緒に描いていく場合、イメージをお互いに共有・共通理解することが必要になってくる。そこで教師は遊びの様子を見守ると同時に、幼児同士が友達の戸惑っている気持ちに気づいて助け合い、個々の意見を遠慮することなく出し合った上で、折り合いがつけられるよう支えていくことが必要である。ただし、折り合いをつけていく中ではその時の個々の気持ちや心の動きなど、教師は丁寧に把握しておくことが欠かせない。こうして、いろいろな場面でためらうことなく自己を表していく経験の積み重ねが、自信をもって描いていくことにつながっていくと思われる。

また、教師は描きたい時に自分達で環境を整えて描き始められるよう、普段から素材の特性や扱い方を知らせたり、環境を整えていく援助だけでなく、集団の中で一人ひとりの幼児が自己を発揮できているか、日々の生活の中でお互いの良さを認め合う場を意識的に設けたり、仲間関係を築けるような援助が大切である。

IV. まとめ

今年は、描くことに取り組みにくい幼児について、このような要因があげられた。その要因については、3・4・5歳児の年齢別の特徴だけでなく、そこに個人差が大きく加わることが分かった。そして、一人ひとりに応じた援助が充分できていたか、教師は自分の今までの経験から、思い込みや活動の先を見通すことにより、教師の援助がいつも同じようになっている傾向があるのではないかと、教師自身も描く時に形にとらわれたり固定観念があったりするのではないかなど、課題も明らかになった。

今後も、個々の教師の描くことについての考えや、幼児理解が大きくかわってくると考えるので、より一層一人ひとりの幼児のここを受けとめ、寄り添いながら、自分の保育をひたむきな姿勢で見直し、より深い幼児理解、援助ができるよう励んでいきたい。